



Data

監督・脚本: マルガレーテ・フォン・トロッタ

出演: パルバラ・スコヴァ/アクセル・ミルベルク/ジャネット・マクティア/ユリア・イエンチ/ウルリッヒ・ノエテン/ミヒヤエル・デーゲン/ニコラス・ウッドソン/シャーシャ・レイ/ヴィクトリア・トラウトマンズドルフ/クラウス・ポール/フリデリック・ベヒト/ミーガン・ケイ

👁️👁️ みどころ

この人、一体ダレ?そんな主人公を描いた、「小難しい映画」が日本でも静かに大ヒット!これは喜ばしい!

ナチス・ドイツの迫害を逃れ、アメリカに亡命した女性哲学者が書いた「アイヒマン裁判」傍聴記の結論は「悪の陳腐さ(凡庸さ)」だが、さて、その意味は?マスコミによる情報の単純かつ一方的垂れ流しが当たり前の昨今、「深く思考すること」の大切さを日本全体で再確認したい。

ちなみに、本作を観れば、喫煙も思考に有効?思わずそう思ってしまったが、「日本禁煙学会」は本作のメチャ多い喫煙シーンをいかに・・・?

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■この人、一体ダレ?アンナ・カレーニナなら知ってるが■□■

今どきの「AKB48世代」ならともかく、私たち「団塊の世代」なら、トルストイの名作『アンナ・カレーニナ』はだれでもよく知っている。近時、イギリスのジョー・ライト監督が映画化した『アンナ・カレーニナ』(12年)では、アカデミー賞美術賞、衣装デザイン賞等にノミネートされた帝政ロシア時代の豪華絢爛たる美しさと、キーラ・ナイトレイの美しさが際立っていた(『シネマルーム30』105頁参照)が、ハンナ・アーレントって一体ダレ?多分、団塊世代のおじさん、おばさん達でも、ナチス・ドイツの強制収容所から脱出してアメリカに亡命し、『全体主義の起源』をはじめとする多くの著書を書いた、ハンナ・アーレントの名前は知らないのでは?もっとも、ドイツ人の哲学者ハイデガーは有名だから、ハイデガーに師事して哲学を学んでいた学生時代に、「この恩師と不倫関係にあった女子学生」と聞けば、少しはとっつきやすいかも・・・。

ハンナは裕福な中流階級のドイツ系ユダヤ人だったから、フランスに居住していても、

ナチス・ドイツ台頭後は強制収容所送りという悲惨な目に遭わされたが、逆にドイツ人の恩師ハイデガーは親衛隊に入隊し、ナチス・ドイツのために働いた、というから皮肉なものだ。本作は、日本人にはほとんど馴染みのない、そんな20世紀の大哲学者ハンナ・アーレントを主人公として取り上げたものだが、今どきそんな映画が日本でヒットするの？ そんな心配をしていたが、何の何の・・・。本作は口コミの広がりの中で大ヒットすることに。

■□■アイヒマンはどんな男？ホントに極悪非道の男？■□■

ナチス・ドイツを率いたアドルフ・ヒトラーに忠誠を誓い、反ユダヤ主義を貫いた、極悪非道の「三悪人」は、まず①宣伝大臣のヨーゼフ・ゲッベルスと、②ナチス親衛隊全国指導者のハインリヒ・ヒムラーの2人が有名。そして、その3番目には、地位こそナチス親衛隊中佐と低いが、「ユダヤ人問題の最終的解決」(ホロコースト)に関与し、数百万人の人々を強制収容所へ移送するにあたって指揮的役割を担った、アドルフ・アイヒマンが挙げられる。

ヒトラーの最後は『ヒトラー～最期の12日間～』(04年)で描かれたとおり(『シネマルーム8』292頁参照)だが、ゲッベルスは妻や6人の子供たちと共にヒトラーの総統地下壕に移り住み、5月1日に自殺した。他方、アイヒマンは、バチカン発行のビザと偽名を使ってアルゼンチンへ逃亡し、潜伏生活を送ったが、必死にその行方を追っていたイスラエル諜報部(モサド)によって1960年に逮捕され、イスラエルで裁判を受けることに。



『ハンナ・アーレント』 発売日：2014.8.5 発売/販売元：ポニーキャニオン

価格：DVD、Blu-ray共に¥4,700(本体)+税

(C) 2012 Heimatfilm GmbH+Go KG, Amour Fou Luxembourg sarl, MACT Productions SA, Metro Communications Ltd.

日本の戦争犯罪を裁いた「東京裁判」をテーマとした映画では、『ブライド 運命の瞬間』（98年）が有名だが、それ以外にも、藤田まことがB級戦犯・岡田資（たすく）中將を演じた『明日への遺言』（08年）（『シネマルーム18』243頁参照）や、二等兵がC級戦犯として裁かれることの不条理さに多くの観客が涙した、『私は貝になりたい』（08年）（『シネマルーム21』208頁参照）等がある。しかして、アイヒマンを裁く裁判は、なぜイスラエルで？そして、アイヒマンはホントに極悪非道の大悪人？

■□■なぜハンナがアイヒマン裁判の傍聴記を？■□■

ザ・ニューヨーカー誌から、アドルフ・アイヒマン裁判の傍聴記執筆の依頼を受けたハンナは、なぜアイヒマンを裁く裁判がイスラエルで行われるのかという疑問を持ったが、弁護士の私に言わせれば、それは当然の疑問。しかし、誰でもそんな当然の疑問を持てるわけではないから、そんな疑問を持っただけでも、ハンナの「頭のキレ」がよくわかる。

それはともかく、ザ・ニューヨーカー誌がハンナに、傍聴記の執筆を依頼した第1の理由は、当時『全体主義の起源』によってハンナが有名な哲学者になっていたこと。そして、第2の、それ以上の理由は、ハンナがドイツ系ユダヤ人として、ナチス・ドイツから迫害を受け、危うく強制収容所で命を落とすところだったという経歴に注目したためだ。

先進国は、どのマスコミでも〇〇氏に頼めば〇〇の原稿を、△△氏に頼めば△△の原稿を、ということをあらかじめ想定したうえで依頼している。ザ・ニューヨーカー誌がハンナに白羽の矢を立てたのは、あやうく収容所で命を失いかけた経験をもつハンナならナチス・ドイツやアイヒマンをとことん批判し、アイヒマンが極悪非道な男であることをリアルに描き、伝えてくれると期待したためだ。ところが・・・。

■□■実際に傍聴してみると？聞くと見るとは大違い！■□■

去る1月16日に開廷された、元オウム真理教信者・平田信の裁判員裁判では、裁判の傍聴は、法廷と傍聴席を隔てる防弾ガラスで作られた衝立越しとされた。これはひょっとして、被告人席を透明の防弾ガラスの箱の中に設定した、アイヒマン裁判を参考にしたの・・・？それはともかく、英語、ドイツ語さらにヘブライ語（？）が飛び交う法廷の運営は大変。本作で大きなウエイトを占めるアイヒマンの法廷シーンはすべてイスラエル放送が報道用にとった実写フィルムから抽出したものだから、そのリアル感がすごい。『ブライド 運命の瞬間』を観れば、そこで裁かれた多くのA級戦犯は絞首刑や無期懲役を含む有罪とされたものの、それぞれ自分の言い分を主張することができたことがよくわかる。それと同じように、アイヒマン裁判でもアイヒマンは自由に自説を展開できていることがわかるが、さてその内容は？

この裁判でイスラエル政府やマスコミが期待したのは、アイヒマンは誰が見ても反ユダヤ主義に凝り固まり、ユダヤ人をガス室に送り込むことに執念を燃やし、場合によれば快感さえ覚える極悪非道な男ということ、公開の法廷で明らかにすることだった。ところが、意外や意外、アイヒマンは命令を忠実に実行しただけ、と言い張る「中間管理職」風の典型的な「小役人」だったから、ハンナの傍聴記執筆の手はピタリと止まってしまった。

私は一体ナニを書けばいいの？
また、何が書けるの？悩みに悩み、思考に思考を重ねた挙げ句、ハンナがたどり着いた結論は、「恐るべき、言葉に言いあらわすことも考えてみることもできぬ悪の陳腐さ（凡庸さ）」だが、さてその意味するものは？

本作を観れば、哲学的思考の苦手な日本人でもその概要は理解できるだろうが、より深くかつ正確にハンナの思考を理解するためには、たくさんの資料を集め読みこなすことが不可欠だ。



『ハンナ・アーレント』 発売日：2014. 8. 5
発売/販売元：ポニーキャニオン
価格：DVD、Blu-ray 共に¥4,700(本体)+税
(C) 2012 Heimatfilm GmbH+Co KG, Amour Fou Luxembourg sarl, MACT Productions SA, Metro Communications Ltd.

■□もう一つ、ハンナが傍聴記で明らかにしたものは■□

古き日本共産党の幹部・市川正一の、裁判での主張は『日本共産党闘争小史』としてまとめられた。また、中国共産党の中央政治局委員かつ重慶市の党委員会書記として、現在の習近平国家主席の良きライバルとされていた薄熙来（ポー・シーライ）は、昨年9月22日に無期懲役の判決を受けたが、珍しいことに彼の主張は中国版ツイッター「微博（ウェイボー）」を通して全国に流された。それと同じように（？）1961年にイスラエルで開かれたアイヒマン裁判は、ザ・ニューヨーカー誌に掲載されたハンナの「イスラエルのアイヒマン」と題された傍聴記によって全世界に伝えられたが、その伝え方はイスラエル政府や多くのマスコミが期待するようなものではなく、逆に読み方によっては、ナチス・ドイツによって迫害を受けたユダヤ人が（のくせに）アイヒマンの悪行を擁護するものになっていたから、大変。ザ・ニューヨーカー誌とハンナのもとには読者から厳しい苦情が次々と。

もう一つハンナの傍聴記が明らかにしたのは、ユダヤ人で構成された「ユダヤ人評議会」がナチスの出先機関としてアウシュビッツでのユダヤ人大量虐殺に手を貸したことだった。したがって、これに対しては、アイヒマンを「悪の陳腐さ（凡庸さ）」というキーワードで評価したこと以上に、イスラエル政府とユダヤ人が猛反発！

こんな傍聴記をザ・ニューヨーカー誌に掲載すれば読者から猛反発を受けることは予測できたため、ザ・ニューヨーカー誌編集長ウィリアム・ショーン（ニコラス・ウッドソン）が大いに「憂慮」したのは当然。しかしハンナは「これは事実だ」と断言し、原稿に手を加えることを許さなかったが、それはなぜ？今ドキのテレビや新聞によく登場する「御用学者」や「便利屋コメンテーター」はマスコミの期待する答えを述べるだけの存在に成り下がっているが、本作にみるハンナは、頑固と言えば頑固だが、さすが当代一流の哲学者！

■□■来る者あれば、去る者あり。さてハンナは？■□■

本作は、ハンナの生涯を「伝記モノ」としてまとめたものではなく、アイヒマン裁判とその傍聴記が引き起こした騒動の二点にしぼって、ハンナの役割とその生きザマを描いている。若き日のハンナ（フリデリック・ベヒト）も登場させて、ハイデガー教授との「不倫の恋」の様子も少しは描かれるが、これはあくまでちょっとしたサービス（？）だ。

ハンナは、二度目の夫であるハインリヒ・ブリュッヒャー（アクセル・ミルベルク）と共に1941年にアメリカに亡命したが、アメリカ国籍を取得したのは1952年のこと。本作では、導入部で、アメリカ人の女流作家メアリー・マッカーシー（ジャネット・マクティア）や長年にわたってハンナの忠実な秘書の役割を果たした女性ロッテ・ケーラー（ユリア・イェンテ）の姿が登場する。彼女たちは、ハンナの夫ハインリヒと共に最後までハンナを擁護し、勇気づけてくれる役割を果たしたが、「イスラエルのアイヒマン」を読んだハイデガー教授をはじめとするハンナの多くの先輩・友人たちの反応は・・・？

この執筆によって決定的に対立してしまったのは、ハンナの古くからの友人で、シオニスト連盟幹部のクルト・ブルーメンフェルト（ミヒャエル・デーゲン）や、ハンス・ヨナス（ウルリッヒ・ノエテン）たち。1951年に出版した『全体主義の起源』が世界的に評価され、プリンストン大学やハーバード大学の客員教授を務めている時は、ハーバード大学で哲学を教える夫のハインリヒ教授はもちろん、アメリカ国内やイスラエル国内で多くの友人、知人に囲まれて幸せかつ充実した生活を送っていたのに、こんな仕事を引き受け、ザ・ニューヨーク誌にこんな記事を書いてしまったために多くの敵を作り、「去る者」も生んでしまったわけだ。昨今でいう「ネットの炎上」はその多くが一時的なものだが、ハンナの場合はその反発は根源的なものだったから、ハンナは大変。

さあ、ハンナはそんな苦境をどんな精神で乗り越えたの？それは、じっくりとあなたの自身の目で・・・。

■□■タバコを吸いながらのこの講義は、必見・必聴！■□■

宮崎駿監督の『風立ちぬ』（13年）を観た「日本禁煙学会」から、<「学生が『タバコくれ』と友人にタバコをもらう場面などは未成年者の喫煙を助長し、国内法の『未成年者喫煙禁止法』にも抵触するおそれがあります」と指摘し、また、タバコの広告・宣伝を禁じた「タバコ規制枠組条約」にも違反する>と問題提起されたことを受けて、思わぬ「タバコ論争」が起きたことは、『風立ちぬ』におけるタバコ論争をどう読み解く？』のコラムで紹介した（『シネマルーム31』143頁参照）。その「日本禁煙学会」の面々は、本作におけるハンナの喫煙ぶりを見たら、同じような主張をするのだろうか？思わず、そう思うてしまうほど、本作ではハンナの喫煙シーンが多い。パーティーの席でも、一人でタイプライターに向かっている時でも、とにかくハンナは四六時中タバコを吸っている超ヘビースモーカーだ。「イスラエルのアイヒマン」の執筆によって、世間の攻撃にさらされ始めるとその傾向はさらに助長し、横になって寝ている時でさえ、タバコは手放せない状態だ。これでは、どこのホテルでも貼られている「ベッド上では禁煙」の警告も完全に無視して

いることになってしまう。

本作ラストのクライマックスは、ハンナが大学の階段教室で学生たちに対して行う講義。

「イスラエルのアイヒマン」で物議をかもしたハンナに対してミラー（ハーヴェイ・フリードマン）たち大学教授の面々は、講義の直前に「大学教授の職を辞めていただきたい」と申し出たが、ハンナは断固それを拒否。さて、階段教室で行うハンナの8分間にわたる力強い講義（スピーチ）とは？ハンナは日常の講義でも終わるとすぐに学生の許可をもらってタバコを吸っていたが、この時ばかりは何と「今日だけ、早々に吸うけど許してね」と述べ、何とタバコを吸いながらの講義に。そして、冒頭こそ原稿に目を通しながら静かに話しかけていたが、その後は演壇を行ったり来たりしながら1つ1つの言葉に力をこめて、なぜアイヒマン裁判の結論を「悪の陳腐さ（平庸さ）」としたのかを説明。そんじょそこらの大学では到底聴くことのできない、この8分間の講義（スピーチ）を聴くだけでも、本作を見る価値があることまちがいない。

■ドイツのマルガレーテ・フォン・トロッタ監督に注目！■

私は寡聞にして、本作を監督した1942年生まれのドイツ人監督、マルガレーテ・フォン・トロッタを知らなかった。しかし、彼女は『鉛の時代』（81年）でベネチア国際映画祭金獅子賞を受賞、『ローザ・ルクセンブルク』（86年）でカンヌ国際映画祭主演女優賞を受賞するなど、ニュー・ジャーマン・シネマを牽引する世界でも有名な女性監督の一人らしい。

「ローザ・ルクセンブルク」の名前は、大学入学後すぐに学生運動にのめり込んだ私には、マルクスやエンゲルスは別格として、レーニンやトロツキー以上に魅力的な人物として印象に残っている。ポーランドに生まれドイツで活動した彼女は、ローマ帝国に対する奴隷たちの反乱を指揮したスパルタクスにちなんで、「スパルタクス団」を結成。さらに、それを母体として1918年末には「ドイツ共産党」を創設し、「ドイツ革命」の中での闘いを続け、遂に1919年1月15日には逮捕、殺害されてしまった女性革命家だ。

「ハンナ・アーレント」という人物を素材にして

本作のような見事な映画をつくりあげたマルガレーテ・フォン・トロッタ監督だから、きっと『ローザ・ルクセンブルク』でも、この女性革命家の「実像」を見事に引き出しているのだろう。この映画も、是非鑑賞してみなければ……。いずれにしても、本作を契機としてこのドイツ人女性監督に注目したい。



『ハンナ・アーレント』

発売日：2014.8.5

発売/販売元：ポニーキャニオン

価格：DVD、Blu-ray 共に¥4,700(本体)+税

(C) 2012 Heimatfilm GmbH+Co KG, Amour Fou

Luxembourg sarl, MACT Productions SA, Metro Communications Ltd.

2014（平成26）年1月29日記